

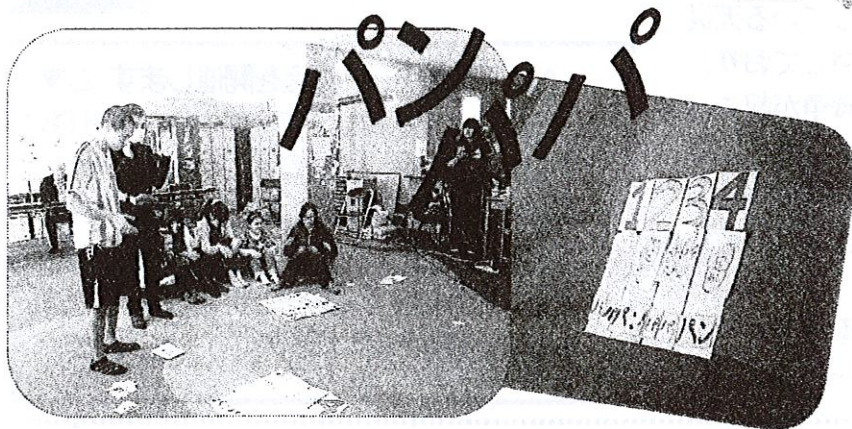
2月24日(月)～28日(金)に行われた学生週の様子をお伝えします。4回目の学生週は悪天候により1週間遅れてのスタートとなりました。

◆1日目「リズム遊び／ボディパーカッション」

授業者の佐藤さんから“体をたたいて楽器にしてみよう”というコールで、手・足・顔・もも・お尻などどこでも「音」が出ることを確かめると、二人の男子学生が出てきてアドリブでのかけあいパフォーマンス。そのみごとに皆の拍手喝采。続いて佐藤さんに合わせて、手・腹・太もも・すね・足踏み・お尻・休止を様々に組み合わせて1.2.3.4のリズムを刻む練習。生徒は皆面白がって夢中になった。

後半はチームに分かれてまずは“まねっこリズム”だったが、リズム発信者が息切れ状態になって終了。次の“お題でリズム”は、‘パン’と‘パパ’のリズムカードと‘胸’や‘もも’などを示す絵札を組み合わせてチームのオリジナルリズムを作って発表。思った以上に多様で楽しいものが完成した。リズム伝言ゲームをはさみ、最後にもう一度2チーム一緒にリズム合わせをして授業は終わった。

“自分自身の体を動かすことで、楽器がなくても音楽は楽しめることを知る”という授業者のねらいが十分に達成された、生徒が楽しめるよい授業でした。



◆2日目①「音楽から見る社会史」

ベートーベンの肖像画と「運命」の曲で座間さんの授業が開始。更に4人の音楽家の肖像画と名前が紹介され、「仲間分けをしよう」との指示に生徒は少しとまどい気味だったが、顔かたちや目、髪の毛などに注目しながら色々な意見が出された。座間さんは‘かつら’と時代で2組にわけ、ヘンデルやモーツァルトが‘かつら’を付けている理由を尋ねた。「髪の毛が薄いから」「カッコいい髪型に見せたいから」「お金持ちに見えるから」などの答えが出たが、更に考えるためにそれぞれの曲を聴き、作曲の動機の説明を聞いた。

この結果、‘かつら’組は雇い主(貴族)の意向(命令)による作曲であり、時代が少し後のショパンやドヴォルザークは自分の意思中心の

作曲であることに理解が及んだ。なお、聴いた曲はほとんどの生徒が耳にしたことがあるもので、クラシック音楽が意外に身近に入り込んでいたことに皆少し驚いた。

動物の毛でできた実際のかつらも用意され、更に音楽家がかつらを着用したいきさつが二人の学生のコントで演じられた。最後に、「エリゼのために」を聴き、「運命」誕生秘話などからベートーベンは‘かつら’組ではないことを確認して授業は終わった。

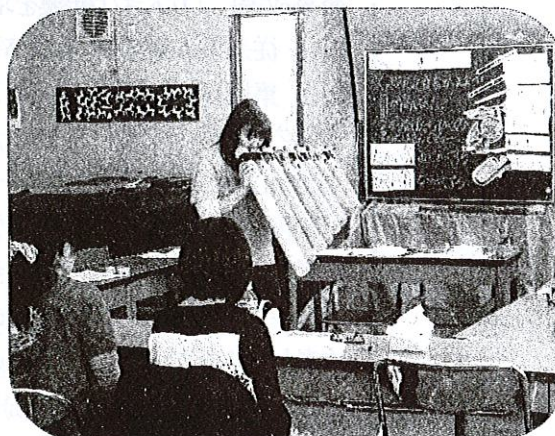
◆2日目②「管楽器のしくみ」

山川さんの授業はストロー笛作りに始まり、ストローの長さと言の長さの関係を確かめてからいよいよ本番へ。7つの管楽器が用意され、本物のリコーダー、トロンボーン以外の模型も大きさは実物大で、大きなチューバ(管の長さは5m以上)を見た生徒からは“ウアー”と歓声が上がった。最初はこの7つを“高い音が出る順番”を予想して並べる課題。小学生には少し難しかったようだ。

山川さんは、実際の楽器の管をまっすぐに伸ばした長さのビニル管

を作っていて、中には9m余りの長さもあり迫力満点。音を鳴らしてみるとその高さが管の長さと言の深い関係にあることは明らかだった。生徒にも吹いて音を出させたかったところだ。

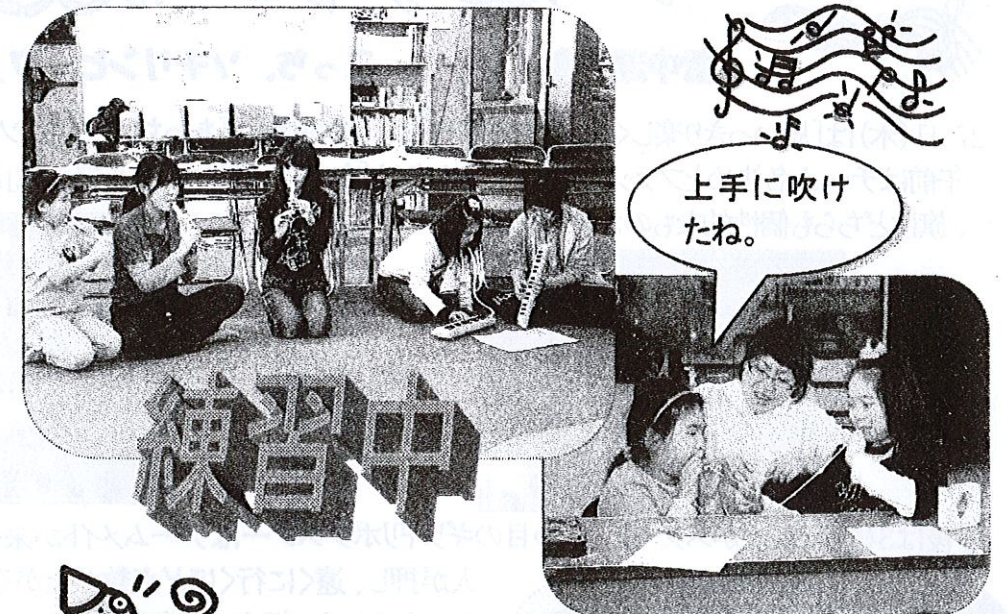
次に、管楽器をフルートなどのグループAとトランペットなどのグループBに分け、その形や仕組みの特徴を考えた。Aは“真直ぐで細長い”“棒の様な形”、Bは“空気の出口が広がっている”“長い管がぐにゃぐにゃしてる”などの声が出た後、オリジナル楽器のスポンジ管が登場し、Aの楽器の音を変える仕組みが説明された。続いてトランペットのピストンの模型が現れ、息の通る管の長さを変えて音の高さを調節する仕組みを鮮やかに見せてくれ、生徒は皆完全に納得。数々の模型に心惹かれた授業はあっという間に終わったような感じだった。



大きな楽器！



この授業の直後に鈴木さんの指導で行った「スライドホイッスル」作りも大成功で、小学生も含めて楽しい音遊びに夢中になっていた。



上手に吹けたね。

◆3日目「英語を日本語に直してみよう」

木立さんによる授業の前半は、子どもに有名なマンガ「ワンピース」ルフィのせりふ「If it's a boring adventure, I don't want to sail」

をどんな日本語に表すのがよいかを考えるのがテーマ。直訳的な日本語に対して“ルフィはこんな言い方はしない”と生徒からの声。

“つまんねえ冒険なら、俺は海に出たくねえ”など、生徒からは性格や場面をふまえたルフィらしいせりふが出てきたが、生徒が知らないストーリーとキャラの人物で日本語のせりふを考えさせたらもっと面白かったのではないだろうか。

後半は学生4人が演じるオリジナル4コマ“マンガ”の日本語訳を考えることになったが、中には英語と関係なくせりふを創造する生徒もいて、授業のねらいと少しずれる結果となった。生徒には最後まで楽しみながらの授業となっただけに、木立さんの最後のまとめである「意味は変えずに言い回しを変える」という指示をしっかりと生徒に伝える努力と工夫があれば、もっと多くの意見をぶつけ合ったり学んだりできる授業になっただろう。(大塚：記)

教育大釧路校の年間実習 ～授業開発コース##

今年度は6.9.12.2月の4回実施。夕張時代から数えて86回となります。今回は「音楽」を大テーマに2年生が大活躍。実際の音・楽器・曲・作曲家を理解実感するというユニークな企画で、仕上げは食育の「ウイーン料理」というフルコース的な盛り上がりでした。(p6 記載+子ども館体験会)

通例の授業検討会、教師塾、最終日打上げ交流も行いこれらの成果・教訓も共有しました。多くの学生は卒業式にも立ち会ってくれ、大感謝です。

2月学生週「閉幕」！